

者は雌性配偶体で  $n=7$  の染色体数を算定した。これは従来多くの研究者によって報告されている *Polytrichaceae* の基本数  $x=7$  と一致し、本種は 1 倍体であることがわかった。

体細胞分裂の中間期、前中期、中期の観察から、本種にも先に筆者 (Ono 1970) が日本産 *Polytrichaceae* の各種で報告したような 3 個の異質染色体 ( $H_1$ ,  $H_2$ ,  $h$ ) の存在することがわかった。しかし、本種の核型は日本産 *Polytrichaceae* のそれと比較して 2 個の V 型染色体の 1 個 (D 染色体) が I 型に変化しており相違が見られた。すなわち、本種の核型式は  $K=V(H_1)+V(H_2)^{nh}+V+I+2J+m(h)$  で示されるが、これは *Polytrichaceae* ではこれまでに報告されていない新しい核型である。

### ○コモチオオアワガエリ (新称) について (水島正美) Masami MIZUSHIMA: On a viviparous form of *Phleum pratense*

ヨーロッパ原産の帰化植物オオアワガエリは何所にでも生えるので、特に草体の大小に著しい変異を示す。此の雑草に胎生形が見出されるので報告しよう。信州南佐久郡南牧村の野辺山が原で 1956 年 10 月 21 日に筆者が採集した (MAK-5831 標本)。本邦には未だ正式報告がないようであるから、標題の新和名を命じておく。学名は次のものが当る: *Phleum pratense* L. f. *viviparum* (S. F. Gray) P. Louis-Marie in *Revue d'Oka* 14: 144-145, 1940; *Problèmes de biologie végétale* 59, f. 10, no. 3, 1941—Fernald, *Gray's Man. Bot.* 8 ed. 165, 1950.

上記の標本では花穂の所々に葉を生じ、大部分の小穂は正常のように見える。どの小穂もえいは葉化せず、1 個ある小花が先祖返りをしている。即ち相抱くえいに囲まれて、1 枚の葉 (2—12 mm 長) が形成されている。えいが約 4 mm 長 (芒を除く) であるから、正常小穂に見えるものゝ多くも亦不稔化していると見て差支ないだろう。此の場合、葉化するのは雌蕊だけらしく、此の葉とえいとに挟まれて 3 個の退化雄蕊が見られる小穂、其の部位に微小な 1 個の鱗片がある小穂、或は変成葉>えいのような小穂では何の痕跡も認められない等の場合を観察した。上記の標本は僅か 1 茎であるが、此の個体に関する限り、どうも小花の構成部分の中で、外花えいと内花えい、鱗被、雄蕊は退化消滅の方向にあり、雌蕊のみが色々な程度に葉化しているように見える。小穂の胎生現象は秋によく起るらしいとの報告があり (P. Louis-Marie 1941)、オオアワガエリやコスズメノチャヒキ (*Bromus inermis* Leyss.) の例を述べている。それによればえいと内外花えいとが葉化するのが常で、雄蕊と雌蕊との消滅、残存は不定だと云うので、筆者の採集品の場合と異なる。胎生化の機構の解明は既に取組まれていよう。何方か研究物の所在を御教示下されば幸甚である。

(東京都立大学 牧野標本館)